

神の国はわたしたちの間に

|       |                                  |
|-------|----------------------------------|
| 奨励    | 原 誠〔はら・まこと〕                      |
| 奨励者紹介 | 同志社大学キリスト教文化センター所長<br>同志社大学神学部教授 |
| 研究テーマ | 日本とアジアのプロテスタント教会の歴史              |

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。

(ルカによる福音書 17章20―24節)

わたしたちの「間」に

秋学期、最後のチャペル・アワーで、わたしにとってはキリスト教文化センター所長としても最後の奨励です。秋学期の統一テーマは「神の国はあなたがたの間にある」でした。これまでの奨励者もこの言葉を念頭において語られました。わたしもそのようにしようと思います。

その前に、この聖書の箇所について改めて確認しておきたいと思います。いつもイエスと対立していたファリサイ派の人びとからのイエスへの問いである「神の国はいつ来るのか」、つまり、神の支配、神の意志が実現し、充滿している世界、という言葉に対するイエスの答えが「あなたがたの間にある」という言葉でありました。「間」とは何か。人と人という場合、その間の距離が遠い、近い、ということとして理解できるかもしれませんが、イエスの答えはそうではありません。英語の聖書では、「within」という言葉です。この意味は「・・・の範囲内で、・・・の内部に、・・・の内側に」ということであります。言ってみれば、わたしたちが生きているこの世界、そしてこの人間関係、共同体のなかに神の国がある、ということです。あそこではなく、いつかでもなく、今、ここで、この世界の中で、ここに生きている人々、わたしたちのなかに、ということでしょう。

しかし、それは説得力をもって、わたしたちが、心を込めて「そのとおり」（キリスト教の言い方ではアーメン）と言えるでしょうか。

『同志社学生キリスト教運動史』について

このことを念頭において、今日、今学期最後のチャペル・アワーで同志社の歴史を紐解きながら、わたしたちの同志社のなかで、それが確実にあった、実現していた、ということを紹介したいと思います。しかもそれは、現在のキリスト教文化センター（最初は宗教部という名称）の成立、創設の経緯と深くかかわっていることなのです。

一冊の本があります。非常にエネルギーを費やして出版された本です。『同志社学生キリスト教運動史』（同志社学生キリスト教運動史編集委員会編）は、2010年に、関係者の努力が結実して出版されました。わたしは授業や講演のなかで同志社のキリスト教の特徴はどのようなものであるか、いつも力説してきました。関西学院、青山学院、明治学院、立教など多くのキリスト教系の大学がありますが、同志社のキリスト教が他の大学と際立って異なっている点は、同志社は創立以来、社会の動き・課題とキリスト教を、課題の全面に立てて問う、というような姿勢のキリスト教であり、それが同志社の特徴でした。同志社の社会福祉が神学部から生まれて発展していったことなど、語りたいことは多くありますが今日はそのことには触れません。

今日、この本の中から紹介したいことは、1949年、今から65年前、同志社大学に宗教部が生まれた経緯です。この宗教部が1993年にキリスト教文化センターになって現在に至っています。

福井大地震に際して

この本に記されていることを、一部省略しながら紹介します。同志社大学に同志社学生クリスチャンフェデレーション（DSCF）という学生の組織が生まれたのは1948年9月23日でした（わたしが誕生した日と3日ちがいます）。今からお話することは、このDSCFが生まれる前、3カ月ほど前のことです。

1948年6月28日午後5時14分福井市を中心に北陸地方に大地震が起こった。死者3、769人、全壊家屋36、000戸と言う戦後の苦しい生活の中で一層悲惨な出来事であった。福井市は1945年7月米軍の空襲を受け、全都市戸数の90%近い2万6千戸を焼失していた。当時新聞記者をしていた司馬遼太郎はこの時福井市に入り衝撃を受けた。「小学校の女の子が、死んだ赤ん坊を溝川でまる洗いに洗っているのを見て息を忘れる思いがした」と書いている。（『街道をゆく・越前の諸道』朝日新聞2010年2月11日参照）

当時日本基督教団社会部長であった田崎健作牧師から救援の学生を送ってほしいという要請が天下神学部長に届いた。そこで助手であった飯清を隊長とする学生の救援隊を派遣することになった。飯は経験の豊かなパイプオルガンもひける魅力的なリーダーであった。大学以外にも外専、経専、工専、女専各学校にYMCA、YWCA、学生宗教部などのキリスト教組織があった。しかし、期せずしてみんなが手伝いに行こうという声があがり、救援隊が組織されて、まる2か月間にわたる救援活動が行われたのであった。その頃の社会通念からすると、男女学生が合宿するなどということは異例のことであった。女専の片桐哲校長は心配して、監督者もつけずに男女学生が行くことに反対した。そこで天下神学部長が保証するということかたちで、学生の身分ではあったが「準職員」ともいえる飯を総責任者にしたのであった。

飯 清 1922～1995 京都に生まれる。同志社高商・文学部社会学科勉学中徴兵で入隊。少尉となり敗戦で復員。文学部神学科に学士入学、YMCA・宗教部の活動、大学学友会の副委員長・自治会連合副議長となる。福井大震災で救援隊長となって作業に従事、このことから戦後の学生キリスト教運動の活動の基礎を築く。米国留学、倉敷教会、霊南坂教会牧師、教団総会議長となる。（飯清著「主旋律と装飾音」1993参照）

福井における救援活動

救援隊を派遣するに当たり、先ず神学部の学生と全宗教部は、聖歌隊の協力を得て2日間、市内各地に出かけて募金し、慰問品を集めて回った。7月2日、現地でのどのような活動をするかが望まれているかを知るために3人の神学生（中略）が福井に派遣された。結論は（中略）託児所とミルク・ステーションを開くことにきまつた。（中略）7月5日には英文科の宣教師グラント（Robert H. Grant）教授と3人の神学生（中略）が福井につき、準備に取りかかった。断水のため、給水タンク1台をどうしても必要としたが、これは占領軍軍政部がまわしてくれた。グラント教授の努力があったと考えられる。送迎用のトラックも借りた。テントの準備もとのい7日に救援隊の第1陣が到着し、8日から活動を開始したのであった。

被災者たちが復興に全力をあげている間、子供たちを預かるのであるから、そのために必要な道具が京都で集められていった。市内の教会の協力のもとに紙芝居、絵本が借りられた。鉛筆、クレヨンなどの文具や紙風船のようなおもちゃ、キャンプ生活に必要なランプ、蚊取り線香なども買いととのえられた。特に食糧の乏しい時代であったので、参加者は米を持参する必要があった。神学部の宣教師ヤング教授をはじめとする同志社の宣教師たちは貴重な缶詰等を多量に寄贈した。また厚生館が医療品の面で協力した。

（中略）この救援隊のキャンプ生活は飯を責任者とする全くの学生自治による活動だった。参加者は1500名にのぼり、この人々がその後の学園における宗教活動の原動力となっていた。

ある新聞に「震災福井の復興に同志社救援隊員の手記」が掲載されたが、その一部を引用すると「かほるこかげのそよかぜに、君も私も僕たちも赤いほつぺた輝やかせ、明るい子供になりましょう・・・」トラックの上から流れて来る可愛い子供達の歌声は、疲れた福井市民を何となく微笑ますのである。

（中略）救援隊が先ずなしたことは、託児所の開設である。何しろ罹災直後のこととて、そんなものは全然なく、親達は復興、復興で子供の世話も出来ない状態であった。・・・まず市内6か所に託児所、集会所を設定し、毎日集合時間には自動車をもって子供たちを迎え、女学校運動場へと運んだ。託児（原文ママ）は総員で約二百五十名、うち全壊家屋は約七割を占めていた。両親兄弟をなくした子供たちも混じっていた託児たちは地区に六班に分けられ、学生二人づつがそれぞれを受け持った、お話、紙芝居、ゲーム、給食等のブランはいつの間にか過ぎてしまつて、夕方にはまた自動車で送りかえして一日が終つて行つた。みんな意気込んではいるものの、なれぬ仕事のこととて、さすがに子供たちを送ってしまうとぐったり疲れてしまつた。救援隊のもう一つの働きは、ミルク・ステーションの設置で、これはララよりのミルクを毎日二回乳幼児たちに分配するのである。その他人形芝居をもってトラックで市内中をかけ回り回ったり、夜は街頭の片隅で伝道として福音を述べ伝えたり、毎日毎日が多忙であつた。

竹中正夫作詞、飯清作曲（両者とも神学部学生）の「明るい子供」は、福井の子供で知らぬものがない程拡がり、去る日には福井放送局よりこの歌を放送し、なお一層喜ばした。八月に入ると女学校を引き上げ、城の橋教会、神明教会に宿舎、託児所、ミルク・ステーションを移して活動を続けた。八月に入ってから日本基督教団の働きとして残留したのは同志社救援隊のみで、如何に大きな期待がかけられているかは、これによつても分かるであろう。二か月の奉仕を終えて全員帰泊したが、これによつても同志社と福井との関係は切つても切れない間柄になるであろう。角帽姿を見るにつけて「同志社のおじちゃん」と叫ぶ子供達の姿を、何時までも忘れることは出来ない。

その後、クリスマスキャンドルサービスがスタートするが、救援隊が現地で行ったことが下地になっている。隊長の飯清は、当時のことを「夜になると、私たちは町に出かけた。みんな歌が好きだったので、聖歌隊を編成して毎晩がキャンドルサービスだった。勿論私がコンダクターだった。真っ暗な町でローソクを灯した私たちが讃美歌を唄い出すと、労働者や町の人々が集まって来た。百人も二百人も集まった。」と書いている（同書）。

そして1949年に同志社大学に「宗教団」という学生組織が生まれ、学友会のなかで体育団、応援団と並ぶ組織になったとある。

敗戦直後ということは今のわたしたちには、あまり実感しにくいかもしれませんが。しかし、敗戦直後の思想的混迷と空襲と地震による破壊のなかで、生きた人間、失われた命、家族、生活の、その「within」ただなかで、当時の学生を中心に、問われた問い、問わなければならない課題の前で、大学が、教員が、学生が、できることをやり、そしてそのなかから大学内のキリスト教活動が始められていったことが分かります。

### わたしたちの間

このことは、19年前の阪神淡路大震災のこと、あるいは3年前の東日本大震災、そして人間が作り出した、しかし、いまだに人間が完全にコントロールできない現実の前に立つ原発の事故のなかであって、あるいは日本以外の海外で起こっている自然災害の現実のなかで、「神の国」とは何なのか、ということを考えてみれば、当時のことが想像できるでしょう。そこでは、命、くらし、仕事、家族、地域の共同体、すべてにかかわるのです。政治、文化、経済、家族、生き方など、全体がかかわるのです。

これに対して、同志社が、「わたしたちの間」にかかわったことを知りたい。そのような歴史的遺産が同志社にあることを知りたい。キリスト教を徳育の基本とする同志社という言葉葉をわたしたちは知っています。その具体的な展開をわたしたちの先輩の姿から知ることができます。そしてそれはお題目として掲げるのではなく、具体的な活動、働きをとおして継承していかなければなりません。同志社のDNAをわたしたちは確かに継承しているのですから。

そして、より本質的にキリスト教の考え方で言えば、単に社会に関心をもって、社会活動をしましょう、するべきだ、という次元に留まらず、その根拠は、イエス・キリストがわれわれの世界のただなかに、「わたしたちの間」にあって、生きたことです。われわれの人生の、世界の重荷を分かち合ってください、ということこそがメッセージなのです。

大学で多くのことを学ぶ。多くのことを知る。そしてそれに対するレスポンス・応答をどのように担っていくか、一人ひとりのなかで答えを求めていきたいと思います。

2014年1月22日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録